

# ニユのトラ 字 校

福祉と伝統工芸をつなぐ人材育成と仕組みづくり  
2023年度 活動報告書

一般財団法人たんぽぽの家

文化庁委託事業  
「令和5年度障害者等における文化美術活動推進事業」



## 目次

はじめに	2
------	---

## 01 普及と人材育成

1 ニュートラの学校<入門編>in 佐賀	4
2 ニュートラの学校<入門編>in 新潟	5
3 ニュートラの学校<実践編>in 愛知	6
4 エクスチェンジプログラム	12

## 02 伝統工芸・伝統産業などに関わる ミュージアムとの取り組み

1 ラーニング・プログラム(多治見市美濃焼ミュージアム)	14
2 ラーニング・プログラム(大東市歴史民俗資料館)	16
3 アウトリーチプログラム(TSURUMIこどもホスピス)	18
4 アウトリーチプログラム(日本玩具博物館)	20

## 03 海外との交流・展開

1 ヴェネチア	22
2 台湾	23
3 フリーマントル(オーストラリア)	23

04 2023年度のニュートラな活動	24
--------------------	----

## はじめに

### ●NEW TRADITIONAL

今、生活や価値観の多様化や自然環境も含めた社会の大きな変化のなかで、これまでのものづくりを見直す時期にきている。そんななかで伝統のものづくりや工芸の世界においては、よく知られているように後継者不足や製品へのニーズ低下、発信(販売)方法の見直しといった課題がある。また、障害福祉の分野においては障害のある人の賃金の低さや仕事の選択肢の少なさといった課題がある。これらの課題を創造的に解決することをめざし、たんぽぽの家では2019年からNEW TRADITIONALプロジェクト(以下ニュートラ)に取り組んでいる。

ニュートラは、障害のある人とともに、伝統工芸をとおして新しいものづくりのありかたやそれらが息づく生活文化を提案するプロジェクト。これまで、福祉と伝統のものづくりの共同による実例づくりや技術交流、国内各地での伝統工芸と福祉に関するスタディツアー、多様な立場や視点を持った人たちによる対話の場づくりなどを行ってきた。活動を始めた当初に以下3つの目標をたてた。

#### [ものをとおして生活を豊かにする]

ものと人の関係すなわち、つくり方、つかい方、つたえ方を見直し、豊かな生活を考える機会を増やす。

#### [障害のある人たちとあたらしい仕事をつくる]

障害のある人や、自分の能力を発揮する場が限られていた人たちが、技術や感性をものづくりにいかす状況をつくり、自分の仕事に誇りをもつ社会をつくる。

#### [つくり手たちが相互に学び合う場をつくる]

分野を横断し、つくり手が交流し、異なる文化、分野、手法からあたらしいものづくりのヒントを得られる環境をつくる。

### ●ニュートラの学校

そもそも日本の福祉の現場では、陶芸や和紙、染織、木工など、工芸の文化が根つき、さまざまなものづくりに取り組んできた。そのような背景がある中で今の時代において、価値のあるものづくりとはなにか、そもそも価値とはどういうことか、生活を豊かにするようなものはどんなものか、伝統のものづくりを今の生活にいかすことができるか、手応えを感じることができる仕事とはどのようなものか。ニュートラの活動を続ける中でこうした問いがうまれてきた。そこであらためて、自分たちがつくりたいもの、届けたいもの、伝えたいことを考え、福祉のものづくりの価値を高めていくための学び合いの場として、2022年から「ニュートラの学校：福祉と伝統工芸をつなぐ人材育成と仕組みづくり」をスタートした。同時に、異なる分野をつなぐコーディネーターや福祉とものづくりの領域の人たちが出会い、学び合う機会をつくるために、芸術系大学や伝統のものづくりを扱うミュージアム等と連携しながら人材育成事業にも取り組んでいる。

### ●本報告書の構成と概要

2023年度のニュートラの学校の活動をまとめている。各章ごとの概要は以下のとおりである。

## 1. 人材育成

ニュートラの学校入門編、実践編、芸術系大学とのエクステンションを振り返る。入門編はこれまでのニュートラの活動のなかであまり密に連携をしたことのない2つの地域(佐賀・新潟)で、活動を普及させることを目指した。実践編は名古屋で実施。参加者が企画立案できるまでの実践的な力をつけることを目的とした。実践編の内容は、実行委員会にて検討した。エクステンションプログラムは2022年度にひきつづいて京都市立芸術大学とたんぽぽの家やGood Job! センター香芝のメンバーが連携し、計7回のワークショップをもった。入門編では、今後同じ地域で実践編の開催を希望する声もあり、人材育成事業として取り組みを継続できることが理想的である。

実践編とエクステンションプログラムでは参加者や学生、障害のあるメンバーが一定期間共に学び合うなかで関係がつくられていった。特に実践編では事業終了後も、参加者と実行委員による関わりが継続し、活動を報告したり互いの現場を訪問し合うなど、ネットワークがうまれつつある。

## 2. 伝統工芸・伝統産業などに関わるミュージアムとの取り組み

2022年度からニュートラの学校の一環で、ミュージアムでの障害者などのアクセシビリティと教育普及プログラムのアンケートやヒアリング調査、またラーニングプログラムの開発・試行に取り組んできた。今年度は、ラーニングプログラムのほか、アウトリーチプログラムも実施している。本章ではプログラムの内容のほか、関わった関係者(学芸員や職人等)からの感想や意見をまとめている。ラーニングプログラムの開発にあたっては、参加を希望するミュージアムの公募を行うと同時に、地域との連携に力をいれているミュージアムには個別にアプローチした。アウトリーチはこれまで関わりのあった団体に打診した。こうした取り組みはワークショップの実施にとどまらず、最終的には伝統のものづくりを扱うミュージアムの学芸員の人材育成、そしてミュージアムが多様な人にひらかれた地域文化の拠点のひとつとなることを目指している。

## 3. 海外との交流・展開

コロナ禍がひとつの区切りを迎え、人の移動も戻ってきたことにもない、海外からの問い合わせや依頼が増えた。日本の伝統文化と障害のある人の手仕事やものづくりをかけあわせるというニュートラのコンセプトや、商品が生まれた背景、物語が関心を集めた。絵画作品とはまた違ったクラフトの魅力が海外の人にとっては新鮮にうつることがうかがえた。本章では、ベネチア、フリーマントル、台湾での活動をまとめている。

## 4. 2023年度のニュートラな活動

ニュートラとして新しい商品・製品の開発や技法へのチャレンジを続けている。また、これまでの取り組みを紹介する機会も得た。今後も活動の発信を続け、国内外問わずさまざまな地域で活動を展開していくことが必要である。

これまでニュートラの活動を続けてきて、ものをつくることは人と関わることであり、その地域の文化について考えることでもあると実感している。伝統のものづくりと障害のある人の出会いによる仕事づくり、コミュニティづくり、人材育成、それらを通して新しい生活文化を提案するニュートラの運動に、少しでも関心を持っていただければ幸いである。

# 01

## 普及と人材育成

### ニュートラの学校 <入門編> in 佐賀

#### ■目的と概要

佐賀はやきものをはじめ、現在も多くの伝統工芸がある地域である。そうした産地でものづくりにかかわるデザイナーと福祉関係者をつなぐことをめざした。佐賀県と県庁内の事業部門と県に縁のあるデザイナー、クリエイターのネットワークを築き、事業の実現をサポートする「さがデザイン」、そして九州障害者アートサポートセンターの協力を得て実施した。

#### ■開催概要

日時:2023年11月11日(木)

会場:SAGA CHIKA / 佐賀県庁地下ラウンジ

講師:前川雄一・前川亜希子 (HUMORABO:ユーモラボ)

田中淳・伊藤友紀 (tui Co.,Ltd.)

北島敬明 (PERHAPS\_design)

原田祐馬 (UMA/design farm)

協力:佐賀県、さがデザイン、九州障害者アートサポートセンター

参加者数:33名

#### ■リサーチ訪問先

就労継続支援B型事業所THREE GIFT (佐賀市重要無形文化財「備前びどろ」の材を用いて商品づくりに挑戦する)、尾崎人形(神埼市尾崎地区に伝わる焼き物の人形の工房)、名尾手漉き和紙(名尾地区に自生する梶の木を使用した和紙の工房)

#### ■内容

はじめに「福祉を真ん中に考えると社会はもっとのびる」をテーマに活動する、デザイナーユニット、HUMORABO (ユーモラボ) からNOZOMI PAPER Factoryの取り組みを中心に発表を行った。NOZOMI PAPER Factoryは、手漉きの再生紙「NOZOMI PAPER®」の生産とアート活動を行うHUMORABOによる社会と福祉の楽しく新しい関係を探る協働プロジェクトとして、東日本大震災をきっかけに宮城県南三陸町ののぞみ福祉作業所で誕生した。プロジェクトでは、のぞみ福祉作業所は「生活・生産」を、HUMORABOは「企画・販売」を担当しているが、なにより福祉のもつ価値を最大限いかした魅力的な商品づくりに取り組んでいる。今回はそうした商品の根底にある考えや大切にしていること、環境づくり、ブランドとしての価値作りなどを具体的に話してもらった。次に、さがデザインともかかわりの深い、UMA/design farmの原田祐馬さんのコーディネートのもと、地元佐賀のデザイナーであるtui Co.,Ltd.の田中淳さん、伊藤友紀さん、そして、PERHAPS\_designの北島敬明さんとディスカッションを行った。それぞれのデザイナーが障害のある人やその表現と出会ったきっかけ、その魅力を伝えるために考えてきたことなどを共有する時間となった。また、前日のフィールドリサーチでは、びどろの材を用いて商品づくりを行った就労継続支援B型事業所THREE

GIFT、郷土玩具をつくる尾崎人形の工房(写真 上から3つ目)、梶の木をもちいて手漉き和紙をつくる名尾手漉き和紙(写真 一番下)を訪問し、佐賀の伝統のものづくりの今を体験し、今後、佐賀のような産地で福祉と伝統のものづくりをどのように結びつけていくかを考える機会となった。



実践者と語り合い、ニュートラの活動を普及していくことをめざす入門編、座学やフィールドワークを経て企画立案まで行うことによって、より実践的な力をつける実践編、工芸を学ぶ芸術系大学の学生と障害のある人のものづくりを通したエクステンジブプログラムを行った。

## ニュートラの学校〈入門編〉in 新潟

### ■目的と概要

地元で地域のクラフト商品を販売したり商品開発をするhickory03travelers、障害のある人の芸術文化活動支援をする新潟県オール・ブリュット・サポート・センターNASCの協力のもと、福祉施設だけではなくデザイナーや販売店など多様な視点でものに関わる人たちが登壇した。開催翌日には地元の資源をいかした仕事づくりをしている福祉施設を訪問した。

### ■開催概要

日時:2023年11月30日(木)

会場:新潟市美術館 講堂

講師:高野賢二(クラフト工房La Mano)

迫一成(hickory03travelers)

安部剛(Good Job!センター香芝)

参加者数:31名

### ■リサーチ訪問先

NPO法人あおぞら(障害のある人との仕事づくり)、F / style(新潟の伝統工芸をいかした商品提案、販売等)、tricolage(手織り絨毯専門店)

### ■内容

キーノートではクラフト工房La Manoの高野賢二さんより、染織の技術をいかして障害のある人たちと具体的に仕事をつくっている様子をお伝えいただいた。30年間続く活動の転機となったのは染織による鯉のぼりの商品。当時なかなか売れなかった手ぬぐいを活かす方法を考えていたときに、遊び半分で鯉のぼりの柄で染め鯉のぼりの形に縫製。イベントで販売したことがきっかけで想像以上の反響があり、本格的な製造販売へと移行していった。利用者の工賃を上げる工夫をしているが、給料を上げるだけではなく、日々のものづくりをとおしてさまざまなつながりが生まれることが大切にされていた。

後半のディスカッションでは、地元新潟で長くデザインや商品販売、商品開発をしている迫一成さん、奈良のGood Job!センター香芝の安部剛さんが登壇。迫さんからはデザイナーとして地域の隠れたものづくりの魅力伝えるためのデザイン的なアプローチや、継続するための仕組みづくりの話、安部さんからは3Dプリンタを用いたはりこづくりや春日大社境内の杉をつかった人形づくりなどの事例が紹介された。参加者からは一点ものと量産品のものづくりの値段の付け方の悩みや、デザイナーが福祉施設と出会うきっかけをどうつくっていくのかなどの質問があがった。休憩時には実際にLa Manoの商品を会場内に展示したり、新潟市美術館のミュージアムショップでもニュートラの商品を協力販売いただいていたため、参加者が実際に手にとって交流することができた。

翌日のリサーチでは、阿賀野市の「あおぞらソラシード」にて、アップサイクルによる着火剤製造(写真上から3番目)やアロマオイルの精製などを見学。新潟のものづくりを紹介する「エフスタイル」、オーダーメイドの絨毯製造をしている「toricollage」(写真一番下)を訪問し、地域のものづくりの魅力について触れる機会を得た。



## ニュートラの学校 <実践編> in 愛知

### —「福祉と伝統のものづくりをつなぐ」企画や実践方法を学ぶ—

#### ■目的と概要

ものづくりを通して地域にある拠点をひらき多様な人たちをつなげながら、新しい視点でものづくりや地域の価値をたかめることができる力をつけることをめざした。参加者は15名。フィールドワークも交えて地域やものづくりのニーズを読み込みリサーチの方法を実践的に学び、最後には、多様な人が体験することのできるプログラムを立案した。

対象:

- ものづくりに取り組んでいたり、地域の中での活動やプログラムを充実させたい福祉施設の職員
- 伝統的なものづくりを通して地域の魅力を発信したい人(文化振興、まちづくり、観光などに関わる行政職員や文化芸術・教育関係者・学生など)
- 伝統的なものづくりや地域の素材などに関心をもつ人を増やしたいミュージアム職員
- インクルーシブな場のつくり方に関心のある人

定員:15名

参加費:6,000円

募集期間:9月29日～10月20日(金)

#### ■参加者募集概要

#### ■実施スケジュール

日時	タイトル	内容	開催方法
11/18(土)、11/19(日)	フィールドワーク&レクチャーin有松	有松での工房訪問、福祉や工芸分野でのものづくりについてのレクチャー、グループワーク等	現地開催
11/28(火)17時～18時	オンライン相談会①	企画について事務局への相談(希望者のみ、事前予約不要)	オンライン開催
12/6(水)10時～11時	オンライン相談会②	企画について事務局への相談(希望者のみ、事前予約不要)	オンライン開催
12/10(日)10時～12時	プレトーク	企画立案の参考となる内容のトーク	オンライン開催
12/10(日)13時半～16時半	企画発表&検討会①	企画したプログラムを発表しアドバイザーからコメントを受ける中間発表の場(調整の上、参加者は①か②のどちらか1日に割り振られる)	オンライン開催
12/17(日)13時半～16時半	企画発表&検討会②	企画したプログラムを発表しアドバイザーからコメントを受ける中間発表の場(調整の上、参加者は①か②のどちらか1日に割り振られる)	オンライン開催
1/14(日)15時～19時半	公開企画発表会	企画の最終案を発表。一般の聴講参加もあり	現地開催

# ニュートラの学校 <実践編> in 愛知 実行委員会

## ■目的と概要

ニュートラの学校<実践編>を地域や伝統的なものづくりの今のニーズに即した内容にすることをめざして開催した。どのような人を対象とした講座にするか、課題は何か。分野を横断し実践を重ねている委員ならではの意見が集まった。

また、会議の前後には、委員の水上さん、井上さんがそれぞれ施設長をつとめる生活介護事業所さふらん生活園と生活介護事業所FLAMEを見学した。さふらんには2年ほど前からSFRNという名義の活動があり、利用者の「ゆらぎ」をいかした作品を発信している。また、FLAMEでは近隣の渋柿や灰を貰い受けて、柿渋染に取り組んでいた。歴史をふまえ地域のなかでの循環から商品を生み出したり、材料も含めものづくりを見つめ直す姿勢は今後のニュートラの参考になった。

日時:2023年8月2日(水)

会場:さふらん生活園

## ■委員からの意見

浅野翔(デザインリサーチャー)

商品をつくる、イベントを起こす、という違うアプローチ両方が「ニュートラの学校」で学べる項目にあったらいいと思う。受講者の発表の場として、それらが集まったフェスティバルの形式を取れたら楽しそう。

井上愛(NPO法人motif理事長)

自分自身が施設職員として福祉の世界で製品づくりを実践し、長年試行錯誤してきた。地域を巻き込む提案をできる企画力をつけられるような講座に、魅力を感じる。また、福祉×ものづくりを今プロデュースしている人の思考やスキームを、福祉施設の職員や利用者さんが写しとって実行できるような講座は、需要があるように感じる。

岩城鮎美(多治見市美濃焼ミュージアム学芸員)

\*オンライン参加

教育普及を担当。作陶だけならば多治見市内いろいろな施設で体験することができるが、当館は美術館でありかつ小規模ミュージアムで機動性が高いからこそ、さまざまなまなびを来場客に提供できる。自分が「ニュートラの学校」を受講するなら、実際に施設に所属しており、目的意識をもった方々と出会うことができるのが理想だ。

佐藤一信(愛知県陶磁美術館館長)

子供や障害のある人が参加しやすくあってこそミュージアムが各地域に存在する意義があるという信念のもと、さまざまに実践してきた。福祉施設のものづくりにおいては、それをサポートする側の姿が一般の方にもっと見えてくるようになれば、巻き込まれる人ももっと増えるはずだ。



高橋孝治(デザイナー)

2020年よりNEW TRADITIONAL に携わりはじめた。継続して福祉施設に関わっており、そこに流れる時間感覚と生産活動との関係を体感し、暮らしを見直すことを社会に提示する鍵がここにあるのではないかと感じている。ニュートラの学校<実践編>本体とは別に、ミュージアムと障害者福祉との関係に問いを立てるようなイベントを設け、段階を踏んで「福祉×伝統工芸×ミュージアム」に移行してはどうだろう。

水上明彦(さふらん生活園施設長)

さふらん生活園がものづくりを通じて社会とつながっていくことを模索中。施設の内外をつなぐことを考えるとき、施設外部の人すら「内部」だと、おらかに捉える構えている。職員たちは、日々の活動で利用者さんと一緒に実際に手を動かし、ものをつくり出すよるこびを感じている。「施設がつくるもの」の魅力を伝えたいし、学びを深めたい。

## ニュートラの学校 <実践編> in 愛知 フィールドワーク&レクチャー



1日目の様子

### ■概要

2日間にわたる地域の課題解決の実践例や魅力発信の事例、開かれた場づくり・プログラムづくりなどについて学ぶワークやレクチャーを名古屋の有松とさふらん生活園を会場に実施した。福祉の現場のものづくりの価値や工芸や伝統工芸のこれからの可能性を考えるレクチャーからの振り返り、参加者それぞれの企画の種を洗い出す時間を取った。

### ●1日目 フィールドワークとレクチャー

日時:11月18日(土) 10:00~17:00

会場:有松コミュニティセンター大会議室、和室

「地域の魅力を見つけて発信するには一有松の事例から考える」

案内役:浅野翔(デザインリサーチャー)

訪問先:有松・鳴海絞会館、有松工芸

伝統工芸品「有松・鳴海絞」の産地で日本遺産にも認定される有松地域でのフィールドワーク。まず、デザインリサーチとは何かの基礎講座では、望ましい未来を少しでもひきつけるための各種手法として、マクロ分析、ストーリーボード、シナリオ制作などを、たくさんあるうちのいくつかとして教わった。続いて、伝統工芸がおかれた現状をデータで確認したり、産地における近年の動きの例、その中で有松の状況を学んだ。

有松・鳴海絞会館では、「一人一技法」と言われる絞りのバラエティの豊かさを知り、障害のある人にあつた方法があるかもしれない、といった話題もあつた。有松に現存する染場で最古の昭和20年代の工場「有松工芸」では、7代目の濱島正継さんから、生産者の視点からの話をたっぷりうかがうことができ、参加者とも活発な質疑応答がかわされた。

1日目の最後は有松地区を題材にしたエクササイズとグループワーク。「2050年の未来の有松に突入するために2034年の有松を想像する」といった課題について博報堂生活総合研究所の未来年表を活用しながらグループ毎に考えた。

### ●2日目 レクチャーと振り返り

日時:11月19日(日) 10:00~18:00

会場:さふらん生活園

「福祉の現場でのものづくり」

講師:水上明彦(さふらん生活園園長)

宮崎祐弥(さふらん生活園スタッフ)

井上愛(NPO法人motif理事長)

「工芸から未来を想像する」

講師:山崎伸吾(ディレクター/キュレーター)

高橋孝治(デザイナー)

水上さんと宮崎さんからは、障害のある人がものづくりに関わることで生じるゆらぎや差の価値を見出し、商品開発などを行っている例を実物を見せながら紹介いただいた。井上さんからは、デジタル刺繍ミシンをつかったものづくりや柿渋染から日々の地域との交流までお話いただいた。山崎さんは、主に伝統工芸の分野でつくり手とつかい手の接点が生まれる企画を行っている。リニュー

アルディレクションをつとめた京都伝統産業ミュージアムのアクセシビリティ向上の取り組みや、伝統工芸に実際に国内外から集まる目はあるような点に向いているのかといったことなど、福祉施設の周辺ではあまり知る機会のない内容が共有された。デザイナーの高橋さんからは、福祉施設に、「戻れるところまで戻るものづくりの場」としての可能性を感じているといった話があった。レクチャーの最後は、中央に高橋さんの蒐集物をかこみ、意見交換会。「作る=捨てる」であることを意識したい、という山崎さんの言葉も聞かれた。

振り返りでは、「印象に残った取り組みや気づき」「自身の活動領域での課題」「今回ヒントになったこと、使えそうなこと(手法や方法)」をつなぎ合わせ、「今後どのような企画を考えていきたいか」を個々にシートにまとめていった。15名分のシートを会場に並び、事務局や講師も交えて見合う時間をとった。聞きたいことや、自分が提供できる情報などを互いに書き加え、企画を深めていくための材料をそれぞれ持ち帰った。

●企画発表&検討会(オンライン)

日時:12月10日(日)、17日(日) 13:30~16:30

アドバイザー:浅野翔(デザインリサーチャー)

井上愛(NPO法人motif理事長)

岩城結美(多治見市美濃焼ミュージアム学芸員)

佐藤一信(愛知県陶磁美術館館長)

高橋孝治(デザイナー)

水上明彦(さふらん生活園施設長)

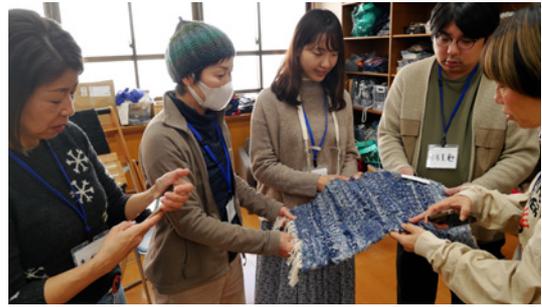
プレートク

「プログラムをつくるには—光るどろだんごづくりから学ぼう—

日時:12月10日(日) 10:00~12:00

講師:磯村司(INAXライブミュージアム スタッフ)

企画をより魅力的で現実的なものに近づけるための中間発表の機会。参加者を2つのグループにわけて2日程にわたって開催し、それぞれ異なるアドバイザーが立ち合った。アドバイザーはニュートラの学校<実践編>の実行委員が兼任した。また、初回の企画発表&検討会ではプレートクを実施し、INAXライブミュージアム「土・どろんこ館」の名物プログラム「光るどろだんごづくり」の開発の裏側から、多様な人が参加することができ、企画を継続していくための工夫を聞いた。



2日目の様子



プレートク

# ニュートラの学校 <実践編> in 愛知 公開企画発表会

## ■概要

ニュートラの学校<実践編>の15名の参加者は、地域やものづくりのニーズを読み込むリサーチの方法を実践的に学んだうえで、自ら課題を分析し、多様な人が関わることのできるプログラムを3カ月の間に構想した。さらにアドバイザーの助言をうけ、ブラッシュアップした、企画の最終案を一般公開で発表する会をもった。発表に対しては、アドバイザーが講評を行った。

日時:2024年1月14日(日)

15:00~19:30

会場:FabCafe Nagoya

(愛知県名古屋市中区丸の内3丁目6-18 レイヤードヒサヤオオドリパーク ZONE1)



会場の様子



### 1.岩垂理沙

HITOTOKI/重症心身障害児の、衣装〜撮影〜アルバムまでフルオーダーの写真撮影



### 2.水野久子

もっと笑って、もっと楽しく、ふくしをひろこう。ふくしのトビラ/福祉事業所とクリエイターが繋がっていくためのプラットフォームプロジェクト



### 3.菅原春香

福祉職のためのデザイン入門講座/福祉施設の現場の人がデザインの活用方などを具体的に知れる講座



### 4.竹之下舞・山口久美・山崎慎也(つむぐ学舎こづかやまlaboratory)

つむぐモノづくり シリーズ #1 だって、木工センターなんだもん/福祉施設に家具木工所があるからできる商品づくり



### 5.山根麻子(チーム宝箱)

これまでの活動、そして今後に向けて/岐阜県の障害者福祉施設における創造的活動を、より社会につなげたい



### 6.中野温子(デザイナー)

proyect HUAYÑO わたしのいつものごはん/ポリビアで展開する障害児童福祉プロジェクト



### 7.田島壮太

『食』を中心としたかじまの交差点 ードーナツから広がる人の"えん"-/福祉施設併設カフェの目玉商品開発や、それによる地域とのつながりづくり



### 8.不死原江里

くるくるつむぐいとのおりのワークショップ/飛騨の養蚕文化を知って感じる、ものづくり体験講座



### 9.加藤裕子(南生協よってって横丁メンタルクリニックみなみ)

藍で人と人をつなげ、そして健康づくり!! 藍愛プロジェクト/藍栽培から心身健康なコミュニティ形成や商品化をめざす



### 10.森村佳浩

淡路島のものづくりから学ぶサーキュラーシステム/土壁づくりワークショップなどの体験プログラム



11. 渥美勉 (近江八幡市地域おこし協力隊 / デザイナー)  
Yoshi GATE WAY Art Project in BIWAKO  
ビエンナーレ2024 / 近江八幡市で伝統的に活用される植物「ヨシ」の活用



12. 長友紀子 (中学校美術科教諭)  
こわすをつなぐ / 金継ぎに着想をえた、修復をキーワードとするコミュニティづくり



13. 森佐知子 (合同会社プラネット)  
わら細工ワークショップ / わら細工を通して農と福祉、地域がつながり、世代を超えた輪が広がる

●アドバイザーのコメント(抜粋)

浅野翔 (デザインリサーチャー)

印象的だったのは、みなさんの企画のなかに、テーマとした素材や環境を遡っていくことで、内容に広がりや生まれるケースがあったこと。更に、どんな人をどの段階で巻き込めるか、かかわりしろを検討しながら企画を深めてほしい。

井上愛 (NPO法人motif理事長)

個人的には、「誰のよるこびになるか」「歴史を紐解くほうにこだわりすぎていないか」といったことに、葛藤しながら福祉施設でのものづくりを続けている。みなさんの今後を楽しみにしている。

岩城鮎美 (多治見市美濃焼ミュージアム学芸員)

焼き物の歴史にてらしても、いつの時点で何が伝統になるかはわからない。新しいことを始める時は周囲の理解が得られないこともある。いずれ伝統になるかもしれないことに今立ち会っているというふうを考え、継続してほしい。

高橋孝治 (デザイナー)

どこにでもある福祉施設が地域との関わり方を工夫し、アートではなく「作業」に着目した新しいものづくりをすることが大事と考え、自分でも試みている。ぜひみなさんも長い目で関わってほしい。新しく飛び込んでくる人が現れる環境にしたい。

水上明彦 (さふらん生活園園長)

福祉施設の利用者さん、スタッフ、地域の方、そして自分も含めて、いかに喜ぶか、楽しいかどうかというのを発想のエンジンにしたいなど思っている。今回は、皆さんの楽しさが伝わってきたので本当に嬉しかった。

※欠席:佐藤一信  
(愛知県陶磁美術館館長)



アドバイザー



集合写真

## エクステンジプログラム

### 京都市立芸術大学との ものづくりプログラム

#### ■趣旨・内容

美術系大学と福祉施設が共同してものづくりに関わる場をつくることで、次代の工芸を担う世代が多様な視点を身につけることを目指した。大学院の授業に位置づけて実施し、一般公開での成果発表の機会を設けるなど、学生や福祉施設を利用する障害のある人の主体的で継続的な関わりをうながすようなプログラムのあり方を模索した。

監修：森野彰人(京都市立芸術大学工芸科陶磁器専攻教授)  
安藤隆一郎(京都市立芸術大学工芸科染織専攻准教授)  
実施枠組：京都市立芸術大学大学院美術研究科  
2023年度特殊演習

#### 第1回 オリエンテーション

日時：2023年10月12日(木)  
会場：京都市立芸術大学

監修の教員から学生に呼びかけてもらい、10名が参加した。事務局より学生にむけて、エクステンジプログラムの趣旨や、オンラインで各現場をつなぎながらたんぼぼの家やGood Job! センターの活動紹介を行った。

#### 第2回 福祉の創作現場訪問

日時：2023年10月31日(火)  
会場：たんぼぼの家、Good Job! センター香芝  
スケジュール：10:30～12:00 たんぼぼの家の見学  
12:00～14:00 昼食・移動  
14:00～15:30 GJ! センターの見学  
15:30～16:30 振り返り

初回のオリエンテーションを経て関心をもった7名の学生が参加した。2つの施設で実際に障害のあるメンバーが創作(フェルト・手織り・アトリエ・陶芸等)する様子を見たり、メンバーに質問をしたりしたあと、GJ! センターにて振り返りを行った。織物をゆっくりと織るメンバーとの出会いから、もっと織りやすくする方法がないか、何がその人にとって「便利」と感じるのか、お互いの時間軸の違いがあるのかもしれない、といった意見がかわされた。また、メンバーがつかう様々な道具を見て、自分自身は道具に体をあわせて自在につかえるからこそ、自分の道具をつくることや補うといった発想がなかった、といった気づきが共有された。



#### 第3回 芸術大学の創作現場訪問&ワークショップ試行

日時：2023年11月9日(木)  
会場：京都市立芸術大学  
スケジュール：11:00 集合  
11:10～12:50 工房見学  
12:50～13:30 昼食  
13:30～15:30 ワークショップと振り返り

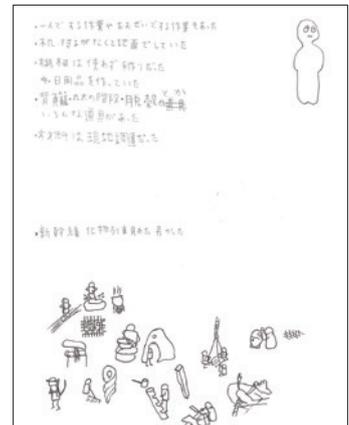
たんぼぼの家とGood Job! センター香芝のメンバー5名が、工芸の工房(染織、陶芸、漆工)を学生に案内してもらった。京都市立芸術大学は10月に移転したばかりだったため、すでに使用された痕跡が蓄積されつつある空間と、これから使い込まれていくであろう空間とが入り混じっていた。ニュートラの活動でうまれた木工の取り組み「たたいてみがいてつくる」を全員で体験し、素材や身体の使い方について意見交換した。ひとつの動きを全員が行うことで、それぞれの工夫や違いを見ることができた。



#### 第4回 映像鑑賞&ワークショップ①「粘土をたたく」

日時：2023年12月7日(木)  
会場：京都市立芸術大学  
スケジュール：11:00 集合  
11:10～12:50 映像鑑賞  
12:50～13:30 昼食  
13:30～15:30 ワークショップと振り返り

前回の試みを受け、原始的でありかつ、身体の特徴をこえて繰り返しやすい行為「たたく」に注目することになった。前半は各国のさまざまな時代の「たたく」に関する映像を鑑賞。映像は、世界中の知の記録の集積をめざした映像による百科事典「ECフィルムズ」より取り寄せた。後半はたたいた痕跡が残りやすい粘土を、金槌や安藤氏が所有する民具等を用いてたたいた。



花谷龍介さん(GJ!センター香芝)による、絵のレポート



### 第5回 ワークショップ②「布をたたく」

日時:2023年12月21日(木)

会場:京都市立芸術大学

スケジュール:11:00 集合

11:10~12:50 ワークショップ

12:50~13:30 昼食

13:30~15:30 ワークショップと振り返り

前は粘土をたたいたが、痕跡が見えやすい反面たたけばたたくほど変化するのでどこで終了するかがわかりにくいといった意見があった。それを受けて今回は帆布を使用した。メンバーや学生には、たたきたい道具を持参してもらい、共有して使用した。布は一人ずつに1枚を配布。前回とは反対に、たたいた痕跡が残りにくいことに苦戦しながらも、布の下にものを置いたり布を水で濡らすなど、工夫する様子が見られた。



### 第6回 ワークショップ③「布を共同でたたく」

日時:2024年1月25日(木)

スケジュール:11:00 集合

11:10~12:50 ワークショップ

12:50~13:30 昼食

13:30~15:30 ワークショップと振り返り

前回、たたくことに集中すると他の人の道具や身体の使い方に興味を払いにくいということがあったため、共同制作を今回の軸に据えた。学生とメンバーが混ざりあった2つのグループごとに、長さのある布をつかって、たたく方法や道具を話し合いながら決めていった。布のを上に丸太を転がしたり、たたく位置をローテーションで変えていくといった、複数でしかなし得ない創作方法が編み出された。



### 第7回 映像鑑賞&ワークショップ④

#### 「一枚の布を全員でたたく」

日時:2024年2月16日(金)

会場:たんぼぼの家 プレイルーム

スケジュール:13:30~15:00 映像鑑賞、ワークショップ

当初は全6回で終了予定だったが、共同制作をもうすこし継続して試みたいという意見があり実施した。休暇の期間に入ってしまったため参加が学生の参加が叶わなかったが、たんぼぼの家とGJ!センターのメンバーらが、これまで自分がつけてきた道具やたたき方などの紹介をする時間をもった。また、メンバーからはもっと映像を見たいという要望があったため、たたくことを生業とする刀鍛冶や船大工の映像資料を鑑賞した。



花谷龍介さん(GJ!センター香芝)による、絵のレポート

## 成果報告会 「素材と身体と行為からものづくりを考える 障害のある人×京都市立芸術大学工芸系の学生=?」

日時:2024年3月8日(金) 17:00~19:00

会場:FabCafe Kyoto

ゲスト:大村大悟(美術作家/彫刻家)

### ・概要

これまでの交流と実験の過程を振り返った。ゲストに、作家活動と並行してさまざまな素材や技法の研究等を行う大村氏を招き、作品も展示した。また、監修にあたった教員と共に活動を振り返り、大学と福祉施設とがたんに一緒に物づくりに尽きない、このエクステンジプログラムが目指していたことについて語った。後半は大学から学生3名、たんぼぼの家とGJ!センターからはメンバーやサポートに関わったスタッフ計6名が参加し「共同作業から生まれるもの」「道具と身体の関係」「リズムと音・反復すること」などをキーワードにコメントを述べた。ワークショップを経て完成した木、土、布の作品の展示も行った。

### ■関わった人からの感想や意見

#### ●森野彰人(京都市立芸術大学教授)

ニュートラの学校を授業の一部として受け入れたのは、伝統を時間に、技術を行為に置き換えることで、学生が各項目をとらえなおす機会としたいという教育面での期待があった。芸術系大学では、「綺麗な作品・凄い技」を終着点に据えがちだ。だが、ものをつくるとは何か、人がともに生きるとは、といったことを、ものづくりを通して考えたり自分で発見したりするという経験がより重要だということに気づいてほしかった。



#### ●安藤隆一郎(京都市立芸術大学准教授)

「たたく」を他人や機械に任せることは、すでに確立されたベストな方法のように一見感じられたと思う。でも、時間がかかっても自分で至ることの大切さを学生に知ってほしかった。今回のエクステンジでいえば、座る位置をローテーションすることで他人の行為の影響を自ら受けとりに行ったり、丸太をころがすという遊びやコミュニケーションから発生した表現があった。それらは、短い時間の中ではあるが、自分たちで獲得できたことの例と言えるだろう。



●京都市立芸術大学大学院美術研究科工芸専攻在籍生  
美馬摩耶(写真左):授業のあと独自に布を染めたり追加でたたいたりした。何をやっているかをはっきりと理解はできないが、あそぶ感覚でやっている、面白くて続けてしまった。

大西珠江(写真中央):いろんな人と関わりたくて授業に参加した。終盤は、動作など共同の体験をとおして時間を過ごせてよかった。

石田明里(写真右):「やってみただ、これは何だ?」と言葉にもできないことが多かった。最後は、全員でひとつのものを作れてよかった。

※授業に継続的に参加した学生のうち、上記の3名が報告会に参加した。



#### ●Good Job! センター香芝メンバー

西村麻菜(写真後列左):粘土をこねるのは難しかったが、周りの人たちの作業を見回して情報を取り入れた。隣で作業をしている人が、私の作業した粘土からインスピレーションを受けて応答するような作品を作ってくれたのが嬉しかった。

森田祐也(写真後列中央):「何のためにたたくのか」と教員に聞いたら、「それを探すため」と言われたのが印象に残った。

花谷龍介(写真後列右):その時感じたことを絵で描いたのでぜひみなさんに見てほしい。

#### ●たんぼぼの家アートセンターHANAMEMBER

水田篤紀(写真前列左):一人での作業が続くともの足りなかった。道具と体、疲労との関係や、継続の大切さについて考えた。

行方雄大(写真前列中央):ケアしながら自分も作業に参加できたのは、楽しかった。

清水要一(写真前列右):たたく作業そのものや、他人と一緒にたたくというのが楽しかった。一人だとすぐ飽きる。



#### ●会場の参加者から

考古学的な視点からヒントになると、布だけに跡が残っているように見えるが道具や体にも痕跡が残っているのだろう。



エキスチェンジ第6回目でとりくんだ、たたいた布2枚を会場に展示しました



大村さんが美術作品として発表しているものや、素材・道具



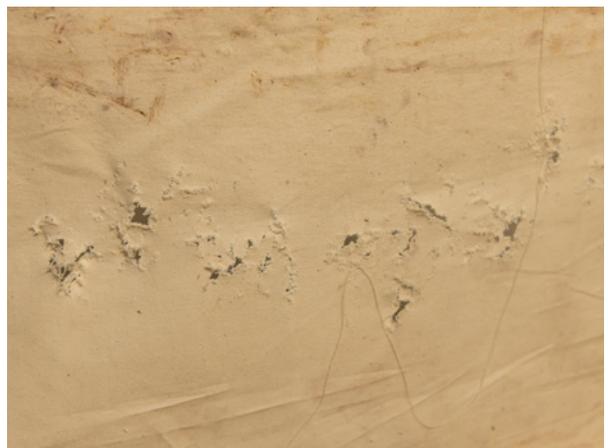
木をたたく



粘土をたたいたものを、森野先生が焼いてくださった



布をたたく



# 02

## 伝統のものづくりを扱うミュージアムとの取り組み

### 1 ラーニングプログラム(多治見市美濃焼ミュージアム)

岩島利幸さん(カネ利陶料有限会社 代表取締役会長)の案内のもと鉢山見学し湖の底にたまった1000万年から500万年前の土に直に触れたり、人間国宝・荒川豊蔵の意匠を受け継ぎ、桃山時代の技法を伝承する水野繁樹さん(水月窯)から敷地内にある土から焼き物をつくる過程を教わるなど、地元の素材を事前リサーチする機会を得た。

#### 開催概要

「CLAY WORKS 原土から砕いて染める:美濃地方の土をあじわい、オリジナルの陶土バッグをつくろう!」

日時:2023年7月17日(月・祝)

1回目・10:00~12:00/2回目・14:00~16:00

会場:多治見市美濃焼ミュージアム 研修室

ファシリテーター:高橋孝治(デザイナー)

参加者数:24名

#### プログラムの内容

まず最初に、ファシリテーターが特製の巨大絵本をつかって、いま足元にある土がどうやって生まれたのか、地球と土と人の関係、日本最大の窯業地、美濃地域の土の成り立ちについて、分かりやすく解説した。使用した原土は全部で8種類(提供:カネ利陶料、水月窯)。参加者はお気に入りの土を1種類選び、それを細かく砕いて、水を加え、顔料にして、布にもみ込み、洗って乾かす工程を体験した。

#### 実施上の工夫

プログラム開発にあたっては、参加の敷居を下げつつも参加者が土に関する学びを深められる内容になるよう、ファシリテーターとミュージアム学芸員とともに議論を重ねた。ひとつひとつの作業内容はシンプルだったため、手を動かしながら参加者同士が打ち解けやすい雰囲気をつくることができた。広報にあたっては、事前リサーチ協力者などのSNSや口コミによる広報で県外から多くの参加者が集まったほか、ミュージアムの協力のもと多治見市内の公民館、図書館、市民活動交流センター等に配架したことで、地域に住む人たちの参加にもつながった。

#### 参加者(アンケートより抜粋)

「陶器問屋をやっている。土を知りたくて参加した」  
「自分の育った(住んでいる)土地の土の色を見てみたくなった。微生物の仕事の大切さも実感できたワークショップとなった。この世界の美しさをさらに知ることができた」  
「陶芸を普段する・しないに関わらず“土”を通してみんなで遊んで学んで楽しかった」  
「どんな方でも一緒に何かに取り組める、そんな社会であるために、こうした活動がもっと各地で広がっていくべきだと思いました」  
「地域のことはもちろん、土そのもの、酸化していく様子、化学?地学?も一緒に学べた体験となった。また違う場所の土を使って染めてみたい。夏、子どもたちと水と土であそぶようにワークショップがやってみたい」  
「今後の公民館講座の参考にしたい。単発の講座としてもおもしろかったですが、他の要素と組み合わせるとストーリー性のある展開にできると良いと思う。土の染め+美濃の土の話+実際の見学など」  
「友人といっしょに染めもの、いろいろ体験会みたいな事をしたいと思う。草木染を中心に今までやってきたが、それに泥染めも加えてできるとステキだと思っている。無限の種類の色が出せると思った」

ニュートラの学校  
ラーニングプログラム  
Vol.01  
CLAY WORKS 原土から砕いて染める  
参加者募集  
美濃地方の土をあじわい、  
オリジナルの陶土バッグをつくろう!

土と人との関係を、学ぶ。

昔から土はいつも身近にあり、生活の道具や仕事に使われ、今にいたります。私たちは、障害のある人たちのつくりを考えるなかで、自分たちの地域にある素材から新しい可能性を探るプロジェクトCLAY WORKSをはじめました。このたび、多治見市美濃焼ミュージアムのご協力のもと、日本最大の窯業地である、美濃地域の原土をおもにつかって、砕いて、ふるって、攪って、細かくして、顔料染めを行います。約500万年ほど前に美濃地域に存在した湖の底に堆積した土で布を染める今回のワークショップ。美濃地域の中でも採掘場所によって土の色が異なることを知り、粉にした原土が加水によって粘土へ、さらに加水して泥へと、土の質感が変化し焼き物にも染物にも使えることを体感することを目的としています。自分の手のなかでさまざまな変化する土の表情をどうぞお楽しみください。みなさんのご来場をお待ちしております!

会場 多治見市美濃焼ミュージアム 研修室 岐阜県多治見市東町 1-9-27

日時 2023年7月17日(月・祝) 2回開催(各回2時間)

時間 1回目 10:00~12:00 2回目 14:00~16:00

募集対象 土に関心のある人ならどなたでも(障害の有無、年齢、国籍など問いません)

参加費 2,000円(材料費)

※小学生以下のお子様に参加される場合は、保護者の付き添いが必要です。  
※障害等の理由により参加にあたってサポートが必要な場合は、サポートする方と一緒に参加してください。

※別途入場料が必要となります。大人 320円、小学生 210円  
高校生以下、障害者手帳の交付を受けている方とその付添いの方1名は無料。

地域にある伝統工芸・伝統産業等に関わるミュージアム、また伝統工芸の職人らと連携して、障害のある人や高齢者、子どもや外国人等、さまざまな背景をもつ人々と共にものづくりの楽しさや、地域の歴史文化に触れることができるラーニングプログラム及びアウトリーチプログラムを開発・実施した。目指すのはミュージアムが多様な人にひらかれることで、地域文化のハブとなることを実施後のアンケートや聞き取りから、広報の方法やプログラムの環境づくり、配慮が必要な参加者への対応などが、どうあったらよいかを検証した。



### ●講師

高橋孝治(デザイナー)

事前に鉾山をフィールドワークしたり、集まった多種多様な原土をとおして、美濃地方が国内最大規模の窯業地であることを実際に体感することができた。自ずと参加者の好奇心も強かったように思う。美濃焼ミュージアムさんが、事前の準備など含めて大変協力的で、一緒に作っていくイメージがあった。地元の水月窯さん、カネ利陶料さんをご紹介いただいたのも大きい。今回参加されたカネ利陶料の岩島さんの、土を砕きながらの「酸化していつるな〜」の解説が良かった。土が長い眠りから覚めて、空気に触れたわけだから。

課題としては、自分自身の素材の理解が不足している、やきものの素材としての特長の話ができていないと感じた。最初の巨大絵本のブラッシュアップの必要がある。また、やきものの素材としての土の理解を深めていくという課題が明確になった。土を焼いてみるというのもしていきたい。焼いたらどうなるのか?というのもやはり面白い課題だと思う。

### ■関わった人からの感想や意見

#### ●学芸員

岩城鮎美(多治見市美濃焼ミュージアム)

「白いバッグを泥で染めて、水で洗い流して、干した時に、子どもに戻ったような、素直な驚きを感じました。参加者とそれを共有できたのも嬉しかった」

「広い洗い場が無い施設では実施が難しい。特に、泥の処理方法。また、今回は参加者2~3人に対してスタッフ1名の人数で、なんとか対応できたが、工程が多いため、かなりサポートスタッフが必要なワークショップであると感じた」

「これまで地域で活動している美濃焼の作家にワークショップの講師を依頼することはあったが、地域性にフォーカスしたことはなかったかもしれない。『何を作れる』といったプログラムではなく、『美濃地域にはどんな土が使われているのかを知る』プログラムであることが重要だと感じた。この土地だからできること、地域の特性を生かすこと、参加者に何を体験してほしいかを考えることが今後につながっていくように思う」

## 2 ラーニング・プログラム(大東市歴史民俗資料館)

館長の森田拓馬さんと学芸員の森井綾乃さんに館内を案内していただきながら河内地方の歴史をお聞きしたり、収集された民具が置かれている収蔵庫、河内木綿の栽培場所を見せていただいた。同館には、養成講座を受講し、基礎知識を身につけた市民が専門スタッフとして関わる市民学芸員制度がある。森井さんが学生の頃、市民学芸員として活動していたこともあり、市民学芸員の活動について詳しく話を聞いた。

### ■開催概要

「手つむぎコットンワークショップ 綿繰り機と糸車を使って河内木綿をつむごう!」

日時:2024年3月3日(日) 14:00~16:00

会場:大東市立 歴史とスポーツふれあいセンター 4階

多目的室1

ファシリテーター:森井綾乃

(大東市立歴史民俗資料館学芸員)

参加者数:17名

ニョーラの学校  
ラーニングプログラム

### 手つむぎコットンワークショップ

## 綿繰り機と糸車をつかって 河内木綿をつむごう!

参加者募集

自分の手で糸をつむいでみる。

植物と人間は昔から深い結びつきがありました。光合成により糖素をつくり出すという大事な働きをするほかに、植物は、食べ物や薬材になって体内に入ったり、糸や布になって身にまったり、染料としてまわりのものに浸透したりと、わたしたちの生活に欠かせない大切な素材としても存在します。このたび大東市立歴史民俗資料館のご協力のもと、古くから河内地方の特産物であった河内木綿を素材に、綿繰り機と糸車をつかって、種と綿を取り分け、糸につむいでいくワークショップを行います。同館で種から育てた棉花にさわり、昔ながらの道具を実際につかうことで、素材から糸ができるまでの過程を知るだけでなく、地域の歴史や民俗について学ぶ機会をつくります。みなさんのご来場をお待ちしております!

会場 大東市立 歴史とスポーツふれあいセンター 4階 多目的室1

日時 2024年3月3日(日) 14:00~16:00(2時間)

参加者募集 20人 ※先着順

※小学校低学年以下のお子様に参加される場合は、保護者の付き添いが必要です。  
※障害等の理由により参加にあたってサポートが必要な場合は、サポートする方と一緒に参加してください。  
参加費:500円(材料費)

文化庁  
大東市立歴史民俗資料館  
〒599-8501 大東市立歴史民俗資料館 第一号棟4階1号

### ■プログラムの内容

森井さんによる河内木綿についてのレクチャーと、森井さんと森田さんのファシリテーションによる綿繰り機と糸車をつかった糸

つむぎワークショップの2部構成。レクチャーでは、なぜ河内地域でワタが盛んに栽培されるようになったのか、河内の歴史も交えてわかりやすく解説していただいた。ワークショップでは、綿繰り機を用いて種と繊維に分け、その後、4つのグループに分かれて糸車で糸つむぎを行った。また、後半には繊維をほぐす「弓」を用いて、ほぐした綿花のつむぎやすさを体験した。

### ■実施上の工夫

大東市や四条畷市など近隣地域の福祉施設を中心にチラシを配布し、参加につながった。また、ミュージアムが障害のある人などの多様な人を受け入れる機会になるように、ワタを栽培して繊維や布づくりに挑戦している福祉施設や、障害のある当事者にも個別に参加を呼びかけた。全盲の参加者には会場までのアクセスに関して事前にメールで個別に確認をするなどし、当日もワークショップ時の動作や視覚情報についてのフォローを行った。

### 関わった人からの感想や意見

#### ●参加者(アンケートより抜粋)

「現代の日常生活では、得難く貴重な体験を、限られた時間の中でも、比較的ゆっくり十分と思えるほどさせていただけただけことは、たいへんありがたかった。みなさんがどんなことを感じたり考えたりしたのか等を、少しでも話し合ったりする時間が作れば、より深い学びが得られたのでは」

「見えないこともあり、どんな人が参加しているのか全く分からなかった。今後は、最初にごく簡単でも良いので、参加者やスタッフが、互いに自己紹介したり、アイスブレイクをしたりできる時間が作れば、より内容を深めたり、体験を分かち合ったりできるかもしれない」

「綿栽培を含む兼業農家、ひきこもり支援機関をやっています。ワークショップでは、参加者に年齢差、経験値の違いが必ず出てきます。ワークでは、初心者、経験者等のグループ分けも一案かと思えます。講師の学芸員さんの説明の仕方がとてもわかりやすく、勉強になりました。内容もさることながら、話すスピード、強弱、間の取り方など、今回の学びをぜひ今後にかかしていきたい」

「福祉事業所で勤務しているため、利用者の方にも経験して頂く機会があればと思いました」

「綿にまつわるイベントに興味があり参加したのですが、綿は捨てる場所がないのだなと知って、そういったことをしなければなど思いました(一度作ったものを、最後畑の肥料にするくらい)」

#### ●講師

森井綾乃さん(大東市立歴史民俗資料館学芸員)

#### ●ワークショップを実際にやって感じたこと

今回は、既にワークショップを運営している側の方が多かったことや、同じ職場から複数名参加している方がいたことから、道具の順番待ちの時間を、参加者同志の雑談で埋めてもらっていたが、単独参加者ばかりだった場合には待ち時間が長く、いらだたせることになったかもしれないと思う。



●ワークショップを実際にやって気づいた課題

例えば子ども対象であっても、小学1年生向けに話すのと、3年生向けに話すのでは話し方や内容を変えるようにしているが、今回はどのような難易度に設定するべきか障害者対応の経験がほとんどなく迷った。障害の有無や年齢などの情報がイベント直前までわからず、特別な対応の準備が必要なのかどうか不安だった。事前打合せで確認するべきだった。

●普段開催しているWSと今回のWSとの違い

普段、木綿関係のワークショップイベントを行っても、木綿関係者が来ることは少ないが、今回はすでに木綿関係の取り組みを行っている参加者が多くて驚いた。普段来られることがほとんどない奈良県からの参加者や福祉関係者に多く参加いただくことができた。チラシの文言や、たんぼぼの家の影響力のおかげで、地元でもかかわりのなかった福祉関係者にも来ていただけてよかった。チラシのデザインも素敵で、普段見てもらえていない層の目にもとまったのではないと思う。

●講師

森田拓馬さん（大東市立歴史民俗資料館館長）

●ワークショップを実際にやって感じたこと

今までに小学生への出前授業として糸車や河内木綿のWSを実施した経験はあるが、今回のように大人向けで多様な参加者対

応は初めてだった。スタッフの配置が事前に決められていたこと、そしてスタッフ側の人数が多く居たのでケガや事故が起こらずに終わられたことに安堵した。

●ワークショップを実際にやって気づいた課題

今回のイベントの位置付けが、参加者に対して十分な対応ができるかが課題だったのか、実施してみてもどのような問題が出てくるのか（そしてそれに対する対応策にどのようなものがあるか）を洗い出すことに重点が置かれているのが私自身把握できていなかった。糸車や綿繰り機の台数制限もあり、参加者の作業を同時に終わることが出来ないためイベントの最後の締め方が難しかったと思う。

●今後に向けて

主催者側自身で理想を高く設定し、ハードルを高くして足が重くなるのではなく、まずは動いてみて、失敗は次に活かすくらいの気持ちで挑む必要があると思う。また、気軽に参加してもらえるような雰囲気作りや、参加を希望する人から問合せをしてもらえるような環境を整えることだと感じた。ノウハウがあまりにも少ないため単独で同じようなことをやれるか、と言われると自信がないが、例えば公募型ではなく1施設を対象にして、先方の施設職員と協力したイベント実施などは実現できそうだ。また、要望があるならば特別支援学校への出張授業なども検討できると感じた。

### 3 アウトリーチプログラム(TSURUMI子どもホスピス)

TSURUMI子どもホスピスは、重度の障害や疾患のある子どもたちが普段できないことを体験できるイベント「meet up」を開催している。このイベントにあわせ、子どもでも遊びやすくつくりやすい「京こま」のワークショップを実施することになった。また、五感で楽しめる工芸品「おりん」も紹介することで、より楽しめるプログラムをめざした。

#### ■開催概要

「ニュートラの学校 ラーニングプログラム:TSURUMI子どもホスピス×京こま作りワークショップ」

日時:2024年3月17日(日)

会場:TSURUMI子どもホスピス

講師:中村佳之(「京こま匠 雀休」こま職人)、山崎伸吾(京都伝統産業ミュージアム)

参加者数:15名



チラシ

#### ■プログラムの内容

TSURUMI子どもホスピス内の一部屋を会場とし、meet upの開催時間は出入り自由とした。京こまの職人、雀休氏が子どもや家族に京こまの由来やつくり方を教え、好きな色の紙をまるめて円盤状にしていく過程を参加者それぞれのペースで楽しんだ。また、同じ部屋にさまざまな音階のおりんを置き、叩いて音色を楽しむコーナーも設置した。体を動かせない子どもたちは京こまの材料の色を選んだり、おりんの音を聴くなどの体験ができた。

#### ■実施上の工夫

子どもだけではなく、きょうだいや保護者も楽しんだり学べるように、京こまの由来がわかる資料を準備した。大型の車椅子やストレッチャーを利用する参加者が多かったため、ホスピスの設備としてオーバーテーブル(ベッドや車椅子をまたいで使えるテーブル)を使用。また、ホスピス内においても会場の部屋まで来れない参加者のために、施設内で出張ワークショップを開催した。

#### 関わった人からの感想や意見

##### ●参加者(アンケートより抜粋)

「まさか京こまを作る体験が出来るなんて、なかなかない貴重な経験をさせてくださり、ありがとうございました。早速、訪問して下さる関係の方々に見せて自慢しています。笑 おりんも素敵な音色で癒されました」

「紙を巻いて作っているとは思っておらず、とても可愛いこまが出来て嬉しかったです!」

「娘も家族も初めてこまを作りましたが、簡単にできて、周りの方のサポートで娘も少し制作に参加できていい思い出になりました!丁寧にご教授いただきありがとうございました」

「今回参加しなければきっと体験する機会はなかったと思います。貴重な初めての体験をさせて頂きありがとうございます。作る際にもこちらのペースで時間をかけて色を選ばせてもらい、焦らずに取り組めました。体験した時間と出来上がったコマは宝物です」

##### ●ホスピスのスタッフ(アンケートより抜粋)

「実際に伝統工芸に触れることができ、オリジナルの作品も作ることができたのでとても興味深いプログラムでした」

「雀休さんが早くから子どもたちの中に入り、話しかけたりコマを見せたりしている姿がなんとも優しく柔らかく、素敵やなあと思って見ていました。完成品を持って帰れるプログラムなので、親御さんたちもとてもうれしそうです」

「もっと大人数のイベントになると、部屋の手狭さなども出てくると思うので、大きいフロアで出張所のような感じで複数箇所ですべて



験ができるのも良いと思います」  
 「もし何か子どもとの関りのなかで難しいと感じられた場面があったときには、どう(何を)サポートすればよいかを、素直に子どもやご家族に聞いてくださるのが嬉しいです」  
 「京こまの巻いていく紙の太さがもう少し大きい方が障害のある子どもちゃんでもやりやすいのかなと感じた」  
 「バギーの子が制作しやすいような設えと一緒にセットできたら更に良かったのかもしれないと思いました」

● 講師および事務局

講師である雀休さん、京都伝統産業ミュージアムの山崎さんからは、これまで行ってきた子どもたち対象のワークショップとかわらない感じで実施ができたという感想をいただいた。こまの素材選びや作り方も、日頃からやっている方法でほぼ問題がなかった、と、違和感のなさが話題に上がった。また、事前の打ち合わせをしていたことで、「内容はシンプルに、こどもと対等に向き合えるよう

な環境に」といった、ホスピス側の要望に応えることができた。なにより京こまという工芸品自体が、構造が複雑ではなく、身近で安全な素材で構成されていることや、つくったその場で遊べるのでコミュニケーションツールにもなるという、今回のプログラムでの相性の良さを感じた。  
 一方で、運営の振り返りとして、「車椅子利用者が多く、導線やものの配置をもう少し考えておけばよかった」といった、環境づくりに改善の余地があることがわかった。また、病院や施設でワークショップを行うことは、定年という概念がない職人のセカンドキャリアとしてもよい取り組みなのかもしれない、といった、つくり手側の可能性も考える機会になった。

## 4 アウトリーチプログラム(日本玩具博物館)

兵庫県姫路市の郊外にある日本玩具博物館。会社員だった現館長・井上重義が、1963年、一冊の本と出合いをきっかけに、子どもに関わる文化遺産が失われていく状況を知り、全国各地の郷土玩具の収集を始め、現在、世界160カ国から集められた9万点もの玩具や人形のコレクションが6棟の土蔵造に収められている。日本のなかでも郷土玩具の魅力や文化を障害のある人、福祉施設職員らと楽しむプログラムを実施した。

### ■開催概要

「ニュートラトーク『世界と日本 玩具の魅力』」

日時:2024年3月11日(月)

会場:Good Job! センター香芝北館

講師:尾崎織女(日本玩具博物館学芸員)

参加者数:30人

### ■プログラムの内容

午前中に尾崎さんにGJ!センターでの張り子やお面、陶の置物などの郷土玩具づくりの様子やGJ!センターのショップで扱う日本各地の福祉施設の伝統のものづくり(藍染や刺子、陶器など)を見学してもらい、伝統のものづくりの現状についての意見交換を行った。午後からGJ!セン

ターを利用する障害のある人、スタッフ、ボランティア、また福祉施設のスタッフや郷土玩具を扱うお店などから関心のある人などにも参加をよびかけ、トークイベントを行った。

### ■実施上の工夫

トークイベントに先立ち、1月に日本玩具博物館を訪問・見学し、尾崎さんにニュートラの趣旨、今回のラーニングプログラムについての趣旨を伝えた。当日はトークに加え、実際に玩具に触れる機会(鳥のおもちゃをつかってみんなで演奏する)をつくってもらうことで、いろいろな立場の人たちが郷土玩具の魅力を体験できる時間もつくれた。

### 関わった人からの感想や意見

#### ●参加者

とにかく楽しかった、玩具の歴史を知ることができてよかったなどの声が多かった。とくに障害のある人からは、休憩時間にコマや音のなるおもちゃにふれた時間や最後にみんなで行った鳥のおもちゃをつかった即席のワークショップが好評だった。また近隣から参加した郷土玩具に関心のある福祉施設職員や郷土玩具を扱うギャラリーショップからの参加者は、玩具

の歴史や文化、人の生活とのかかわりなどの話をきくことができるとは、との声をもらった。

#### ●講師

福祉施設に集まる人たちが熱心に郷土玩具に関心を持ち、楽しそうに聞いてくれたことが驚きで、尾崎さん自身もとても楽しい時間を過ごすことができたとのことだった。また、GJ!センターでは3Dプリンターやレーザーカッターなどのファブ機材を用いて郷土玩具づくりに取り組んでいたりと、郷土玩具に詳しいデザイナーらとの交流を行い、新しい視点でのものづくりに取り組んでいるが、その様子を見て今後も作り手が少なくなるこの分野のなかで可能性を感じているとの意見ももらった。

#### ●事務局

尾崎さんからは、短い時間で貴重な話を写真をまじえて話してもらった。はじめにおもちゃという言葉の語源、日本の各地で郷土玩具が子どもの成長を願い疫病などをはらうものとしてつくられてきた、といった文化的背景、次に考古学的視点もまじえて世界の玩具の歴史、そして日本と海外のおもちゃの比較など。また、休憩時間では身近な材料でつくることができる郷土玩具の紹介、最後には鳥の笛をもちいてみんなで大合奏を行うワークショップも実施し、楽しい時間をつくってもらった。おもちゃ、玩具は障害のある人もまた年齢にかかわらず、誰にとっても親しみがあり、生活に身近なものであることを認識させてもらう時間となった。ニュートラでは、玩具と障害のある人の表現やものづくりの魅力との関わりに可能性を感じてきたが、あらためて玩具の文化的背景を知ること、かかわる私たち自身の大きな学びとなった。また、事前の訪問や当日の意見交換を通して、玩具の現状などについて知ることができた。

### ニュートラ トーク「世界と日本 玩具の魅力」

おきき あやめ

- ・講師:尾崎織女さん(日本玩具博物館学芸員)
- ・日時:3月11日(月) 13:30~15:30
- ・場所:Good Job! センター香芝 北館
- ・参加費:無料(Good Job Cooffeeでドリンクを1杯ご注文ください)
- ・定員:10人(先着順)
- ・お申し込み: [goodjob@popo.or.jp](mailto:goodjob@popo.or.jp)まで

兵庫県姫路市の郊外にある「日本玩具(がんぐ)博物館」。土蔵造り6棟の建物に、世界160カ国から集められた9万点もの玩具や人形のコレクションがあります。館長の井上重義さんが会社勤めをしながら個人ではじめてコレクションは、世界でもめずらしい玩具の博物館として評価されています。今回は「日本玩具博物館」の学芸員として世界各地の民芸玩具の調査と収集を担当してきた尾崎織女(あやめ)さんをお招きし、世界と日本の玩具、おもちゃの魅力についてたっぷり伺います。



尾崎織女さん  
約30年にわたり国内外での企画展も手がけてきました。著書に、『世界の民芸玩具 日本玩具博物館コレクション』(大福書林)や『中国民衆玩具 - 日本玩具博物館コレクション』(大福書林)など。玩具への豊富な知識と毎回の博物館の展覧会を企画運営するパワーに驚きます。

主催: Good Job! センター香芝/一筆刺田法人たんぽぽの家  
\*文化庁「令和5年度 障害者等による文化芸術活動推進事業」

トークチラシ



# 03

## 海外との交流・展開

この数年、ニュートラの製品を展示販売したいという海外の団体からの依頼や、EC サイトでは海外に住む方が製品を購入されるケースもでてきました。張り子に絵付けのできるワークショップはどの国へ行っても大人から子どもまで人気のプログラムです。日本の伝統のものづくりと福祉の共同から新しい生活文化を提案するニュートラの活動に、国外からの注目が高まっています。

### 1 ヴェネチア(イタリア)

#### ■開催概要

第18回ヴェネチア・ビエンナーレ国際建築展  
日本館展示

会期:2023年9月16日(土)~11月26日(日)

ワークショップ開催は9月16日

会場:カステッロ公園内 日本館 (Padiglione  
Giapponese Giardini della Biennale,  
Castello 1260, 30122 Venezia)

#### ■内容

展示では、「春日大社境内の杉から生まれた燭台」「GJ!のほりこ」「たたいて みがいて つくる木の仕事」といった、ニュートラの活動から生まれた製品を紹介。障害のある人と共に蚕を育て、糸を挽く「お蚕さんプロジェクト」や、シルクスクリーンプリント「LIVE WORKS」といった活動も紹介した。そのほか、ニュートラやGJ!センターの活動を紹介した。ワークショップは各国のキュレーターが一堂に会するパビリオンデーとあわせて開催。「GJ!のほりこ」の絵付けや「たたいて みがいて つくる木の仕事」の木工の技法を体験できるもののほか、来場者が自由にシルクスクリーンプリントができる場所も設けた。

日本館の展示では、建築家・大西麻貴さんがメインキュレーターを務め、デザイナーやアーティストらのチームによって、日本館の空間が、生きた建築としてどう扱われるかが考えられていた。館内には、巨大な布に来場者が自由にシルクスクリーン印刷を施せるエリアを設置。来場者の共同によって刷り上がった大きな布は天井に吊り下げられ、館内を彩った。また、丸太を叩いて磨く「うづくり」と呼ばれる木工の技法を、GJ!センターのメンバーがデモンストレーションし、日本の伝統的な道具とシンプルで原始的な行為の組み合わせは、世界各地から来場した人たちの関心を集めた。張り子の着彩ワークショップは事前予約制とし、現地の子どもたちが多数参加した。



## 2 新竹(台湾)

### ■開催概要

TAKE CARE!

会期:2023年12月1日(金)～

2024年1月7日(日)

会場:春室 Glass Studio + The POOL (No. 2號, Section 1, Dongda Rd, East District, Hsinchu City)

### ■内容

GJ!センターにあるカフェの名物、ホットドッグを模した張り子「Good Dog」。展覧会では、医療・福祉サービスを提供する樂山教養院(台湾)と、障害のある人との表現活動に取り組む福祉施設i-dArt(香港)のメンバーが絵付けをしたGood Dogが会場に並んだ。主催は、アートやデザインによってさまざまな社会課題に取り組む台湾のデザインスタジオ「sandwiches studio」。日本から真っ白な状態で送った張り子は、着彩され、さらに立体物を付け加えられるなどして、よりポップでカラフルな姿になっていた。会場にあるQRコードからは作品解説が読めるようになっており、作家の紹介や使った画材、製作プロセスなどが詳細に記載されていた。

会場のある新竹市は台北から電車で1時間ほど。ガラス工芸が盛んな地域で、展覧会会場のすぐ近くにはガラス工芸博物館もあった。春室 Glass Studioは台湾国内でリサイクルガラスのパイオニアと言われている。代表の吳庭安氏はサーキュラーエコノミーを学び、リサイクルガラスの価値を高める活動に取り組んでいる。福祉と伝統工芸の連携から、新しい生活文化を提案するというニュートラの考えにも深い関心を示していた。会場は公園内に位置していることもあり、親子連れをはじめさまざまな世代が来場していた。また、展覧会会期中には、台中市にある国立台湾美術館において、美術館における知的・発達障害のある人へのアクセシビリティをテーマとした国際フォーラムが開催され、事務局スタッフが登壇。ニュートラの活動や商品も紹介し、関心が寄せられた。



展示作品の解説



## 3 フリーマントル(オーストラリア)

### ■開催概要

“A Rising in the East” Exhibition

会期:2024年2月10日(土)～

4月22日(月)

会場:DADAA (92 Adelaide St, Fremantle WA 6160)

### ■内容

西オーストラリア最大のアートイベント「パースフェスティバル」のフリンジ企画として、フリーマントルで企画された展覧会に出展した。地元の障害のある人たちのアートセンターDADAAにあるギャラリーにて開催。タイトルの意味は「東よりきたる」。日本の障害のある人のアートの魅力を伝える内容で、アート作品は滋賀のやまなみ工房、クラフトはニュートラの製品を展示した。会期中に事務局スタッフおよびGJ!センタースタッフが渡航し、DADAAの利用者に向けてはりこのワークショップを行い、ものづくりとおとした交流が実現した。また、レクチャーではニュートラの取り組みについて、理念や具体的な活動も含めて紹介するいっぽうで、オーストラリア

の伝統文化やアボリジニなど、少数民族の文化なども学ぶ機会を得た。

この展覧会はDADAAのディレクターより「日本の障害のある人の創造性を生かした仕事づくりの事例を紹介してほしい」という打診から始まった。特ににはりこなどの郷土玩具は現地の来場者からも反応が良く、展覧会初日に8割以上が販売された。また、レクチャーでは日本のものづくりの精神性について関心があるという人も多く、ニュートラが日本の伝統のものづくりと福祉のあたらしい仕事づくりのわかりやすい事例になることがわかった。現地在住の日本人コミュニティにも情報が伝わり、来場した現地日本人からは、文化芸術で日本の魅力を伝えられる企画があって嬉しいという声もいただいた。滞在中、オーストラリアのニュートラに当たるものをリサーチしたが、アボリジニの伝統的なアートやものづくりを現代の感覚に置き換えた作品などを鑑賞し、障害のある人たちとの連携により新しいものづくりの可能性があることもわかった。



# 04

## 今年のニュートラな活動

### 1 福祉の玩具 <Fukushi toys> 「杉のコッパン人形」の制作、展示販売

玩具と工芸の間を発掘・探究・創作するユニット「玩具工芸舎」とGJ!センターが共同し、世界文化遺産である春日大社境内の杉の端材にハンコを組みわせて人形を製作した。「農民美術運動」で作られていた木端(こっば) +ハンコで「コッパン人形」。世界各国の民芸玩具のエッセンスを取り込んだ、ボーダレスな意匠と匿名性が特徴で「手仕事のよろこび」に重きを置いて生産された。展示

販売会(2024年1月16日~31日@京都・誠光社)では、約100体の展示品のうち60点ほどの作品を販売した。

アートディレクション・制作協力:<玩具工芸舎>  
制作・販売:Good Job!センター香芝



### 2 鬼の張子面飾りの製作

前年までは張子面専門の工房が製作していたが継続が困難になったため、依頼元が新規の製造先を探していた。そこでGJ!センターでは、工房からオンラインレクチャーを受け、素材や道具の扱いを習得。節分会にむけ約400個の商品製造を工房から引き継いだ。

依頼元:株式会社中川政七商店  
制作期間:2023年8-12月  
制作・販売:Good Job!センター香芝



新しい作品や商品の製作、展示販売など、  
様々な機会でもニュートラを紹介した。

### 3 HERALBONY GALLERY第17回企画展 福祉×伝統のものづくりの可能性 「NEW TRADITIONAL 楽しい実験と実践」の実施

良質な工芸と出会う場を新たに創出するイベント「北のクラフトフェア」に合わせて、これまでのニュートラの活動で生まれた、張り子／陶タイル／和紙／木製品などを展示販売した。会期中には「福祉×伝統工芸の可能性」をテーマに、Instagramのライブ配信によるギャラリートークが開催された。

会期:2023年9月23日(土)～10月22日(日)

会場: HERALBONY GALLERY(〒020-0026 岩手県盛岡市開運橋通2-38 @HOMEDELUXビル4F)

主催:株式会社ヘラルボニー



### 4 工芸都市高岡クラフトコンペティション 2023への応募・受賞

ニュートラから生まれた「たたいて みがいて つくる木の仕事シリーズ」の作品を応募し、プレート作品が準グランプリを受賞した。つくり手の特性や行為に着目し従来の工芸のあり方とびこえた新たなものづくりという点で審査員からの評価を得た。授賞式にはニュートラ事務局のほか、製作に関わったGJIセンターのメンバーも出席した。

会期:2023年11月3日(金)～5日(日)

会場:御旅屋セリオ 2階特設会場(富山県高岡市御旅屋町101)



# インフォメーション

これまでのニュートラの活動をPDFでお読みいただけます。  
冊子のご送付をご希望の方はお問い合わせください。

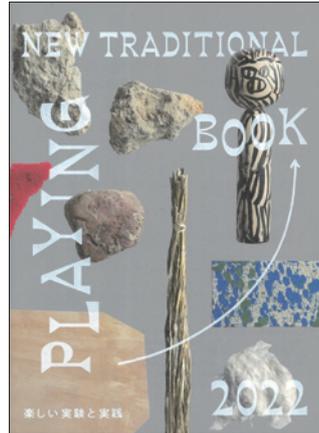
## NEW TRADITIONAL PAPER 2019-2020



Travelogue／福祉と伝統  
工芸の現場をめぐるNEW  
TRADITIONALを見出す  
藤井克英  
Interview／ものをつくる  
前提を引き受けること 人  
の表現の地平を眺めること 吉田勝信  
Installation View／吉田勝信「わたしの  
ニュートラ展」  
Document／ニュートラ日誌2019-2020  
Words／ニュートラ語録  
Insight／ニュートラに関わる実践者に聞く  
これからのものづくりを考える4つの視点 加  
藤駿介、白水高広、水野大二郎、守屋里依  
Column／ニュートラをさがして 高野賢二、  
白井 瞭



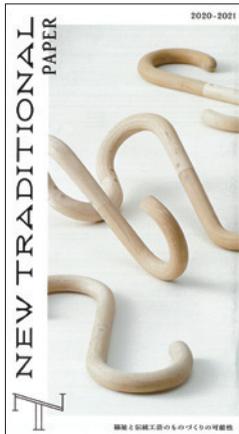
## NEW TRADITIONAL PLAYING BOOK 2022 楽しい実験と実践



english

たたく Beat／ふれる・ほぐす Touch & Loosen／さがす・き  
づく Search & Find／かく・ぬる Draw & Paint／みがく Rub  
& Polish／たす・かさねる Add & Layer／そだてる Raise &  
Grow／ニュートラディショナル15の覚書 ※この部分のみ英  
語版あり／関連プロジェクト

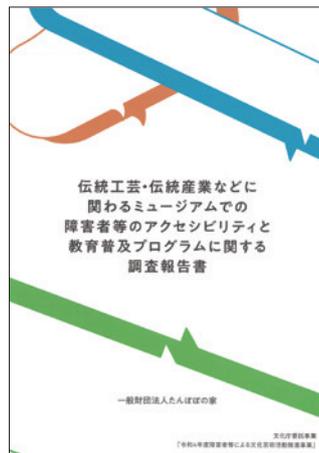
## NEW TRADITIONAL PAPER 2020-2021



Travelogue／土地の歴史・文化・素材に触れ、  
NEW TRADITIONALを見  
出す 森下静香  
Interview／足下にある素  
材の豊かさが、わたしたち  
のアイデアになる 高橋孝治  
Installation View／高橋孝治「わたしの  
ニュートラ展」  
Document／ニュートラ日誌2020-2021  
Words／ニュートラ語録  
Insight／ニュートラに関わる実践者に聞く  
これからのものづくりを考える4つの視点 武  
田和恵、播磨靖夫、軸原ヨウスケ、永田宙郷  
Column／ニュートラをさがして 森口誠、林  
智子



## 伝統工芸・伝統産業などに 関わるミュージアムでの 障害者等のアクセシビリティと 教育普及プログラムに関する調査報告書



## NEW TRADITIONAL PAPER 2021-2022



Travelogue／人と地域  
をつなぐものづくりから、  
NEW TRADITIONALの未  
来を考える 岡部太郎  
Interview／過去も未来  
も、美しいものが好きなんです 川崎富美  
Installation View／川崎富美「わたしの  
ニュートラ展」  
Document／ニュートラ日誌2021-2022  
Words／ニュートラ語録  
Column／ニュートラをさがして 李萬鏗、  
奥村奈央子



ミュージアムでの障害者等のアクセシビリティと教育普及  
プログラムのアンケート調査  
ヒアリング調査／①九州国立博物館 ②木組み博物館  
③さいたま市岩槻人形博物館 ④多治見市美濃焼ミュージ  
アム ⑤京都伝統産業ミュージアム  
ラーニングプログラムの実施／①京都伝統産業ミュージアム  
②多治見市美濃焼ミュージアム ③平城宮跡歴史公園

本冊子で報告した内容をnoteで詳しくレポートしています。  
今後もニュートラのイベントのご案内やレポートをアップします。ぜひフォローしてください。

### ニュートラの学校<入門編>in新潟

---

ニュートラの学校  
入門編セミナーin新潟



ニュートラの学校  
新潟訪問記



### ニュートラの学校<実践編>in愛知

---

ニュートラの学校実践編in愛知  
フィールドワーク&レクチャー①



ニュートラの学校実践編in愛知  
フィールドワーク&レクチャー②



企画づくりに挑戦中 ニュート  
ラの学校<実践編>in愛知



公開企画発表会を開催しまし  
た ニュートラの学校実践編  
in愛知



### エクスチェンジプログラム

---

京都市立芸術大学との交流をしています



ニュートラの学校  
エクスチェンジ編 報告会を開催しました



### ラーニングプログラム(多治見市美濃焼ミュージアム)

---

ニュートラの学校 ラーニングプログラム  
Vol.01:美濃地方の土をあじわい、オリジナ  
ルの陶土バッグをつくろう!



### ラーニング・プログラム(大東市歴史民俗資料館)

---

ニュートラの学校 ラーニングプログラム(3/3  
〔日〕):綿繰り機と糸車をつかって河内木  
綿をつむごう!



ニュートラの学校 ラーニングプログラム:  
大東市立歴史民俗資料館×手つむぎコッ  
トンワークショップをふりかえって



### アウトリーチプログラム(TSURUMIこどもホスピス)

---

ニュートラの学校 ラーニングプログラム:  
TSURUMIこどもホスピス×京こま作りワ  
ークショップ 開催しました



### アウトリーチプログラム(日本玩具博物館)

---

ニュートラトーク「世界と日本 玩具の魅力」  
2024.3.11



## ニュートラの学校：福祉と伝統工芸をつなぐ人材育成と 仕組みづくり 2023 年度 活動報告書

---

発行日 2024 年 3 月 31 日  
発行元 一般財団法人たんぽぽの家  
〒 630-8044 奈良市六条西 3-25-4  
Tel 0742-43-7055 Fax 0742-49-5501  
E-mail nt@popo.or.jp  
U R L <https://newtraditional.jp/>  
デザイン 鯉坂兼充 岡田尚子  
写 真 岡松愛子 (p8,p10,p11)  
河合秀尚 (p17)  
衣笠名津美 (p19)  
仲川あい (p14,p15)

本冊子はNEW TRADITIONALのウェブサイトで音声読み上げ可能なpdfデータを公開しています。  
書字へのアクセスが難しい方はご活用ください。そのほか本冊子へのアクセスに関するお問い合わせは、発行元の一般財団法人たんぽぽの家までご連絡ください。

本冊子は文化庁委託事業「令和5年度障害者等における文化美術活動推進事業」の一環で制作されました。



